

年山紀聞

第四

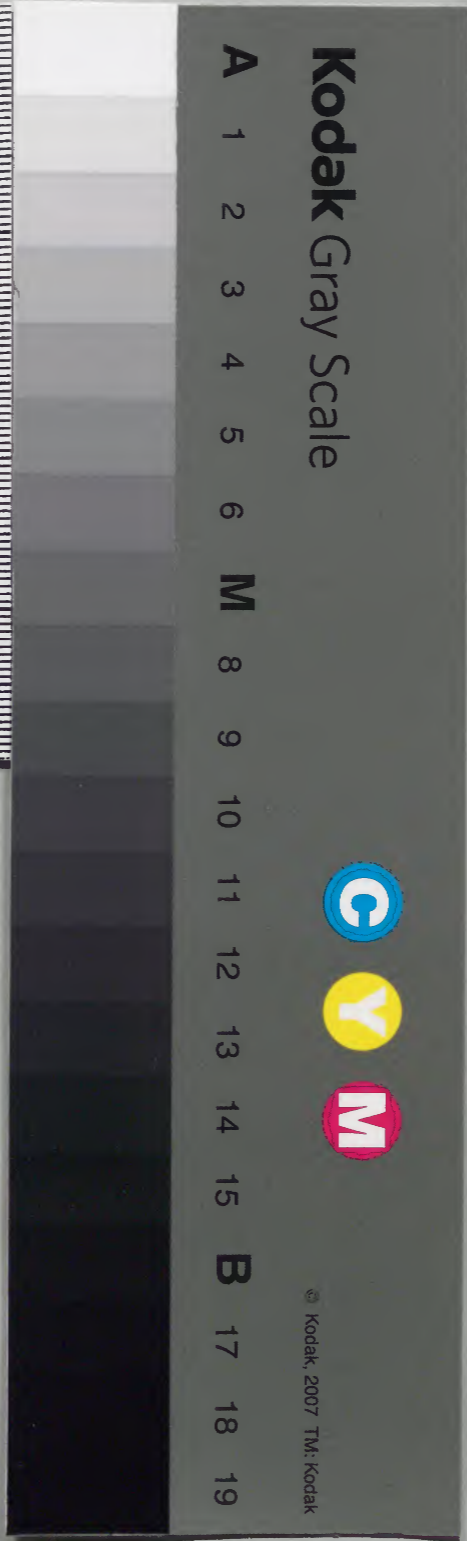
漫筆雜考

					和書門
				二六七八六	
				一三三	
				六册架函號類	

			內閣文庫
			和書
			二六七八六
			一三三
			六册架函號類

漫筆雜考

內閣文庫		
番號	和	26786
冊數	6 (4)	
函號	211	227



年山紀聞

第四

目録

後柏原院北御製



まゝちとる
屋片きうけき

勤臣

玉はく券

白酒尾酒

天子此法諱

蟻とほし

揚名分

とれるもの

なるもの

谷と

いな勢

のまぬ

紫式部

吉凶前定

まぬかの月

浅草文庫

松崎文庫

年山紀聞

雄畧の皇后

渚鳥

あちらをれ

うけらう花

蝶夢集の序跋

由旬

隠岐直清

朽き那が河

くそぬく

釋万葉集跋

哀悼の教

辞世の教

山菅

山多しはな

通茂公の奇

今式部れおひと

一里

和漢同趣

男房女房

二禁

大串元善碑

孝子弥作

年山紀聞

第四

○後柏原院清教

をあらめ一依我せりつふと流風のハチ清くけてゆくそらるれ
 按書るに此清代ハ足利家始末よりして京都の藤原清教
 の権起としくして三草のまがねハ杉の門一禁中をさし後
 するまをさす天子ハ多し清名のまがねハ裏周外むのし
 にもおろりて世の中まがねも天子とり清名のたうど
 まおれ人のまがねはあまうりてまがねを傳送し名の二まが
 眼目とせし事ハまがねゆきあらずなるへしつてまがね
 大樹より列石の大名まがねとすても此清教を産者の教
 として天下國政を治りたるりて古農工商ののこる

年山紀聞

第四

宿かやば麻さあやま女やむいうて福も依りまかこいん
宇治拾遺に平貞文の本院信院の局へ志のひくく西のつらね
に新くまの人のまてらるるれと業内へはんとてそのまのま
ていねえれいお乃うすはるは火ほのかふよりてどのか物とおほ
し記衣もきくくかけてたまの志まのるおほひまてえぬ
らぬま

宿重物の事此のけりや書後おまゆりたりかおねて探りて
くまのまへへそく扱着乃事るるうまのては禁中より殿と
人の宿重なる名をまのたるれをくする感するあまをれ
かおの袋とつよといふ従ハま下におまぬ人のゆりまをり

○まのちとち

吾門の志乃のりつとむむ百子名ちりりハとれと君せきあさ

浄釋云とつとむむと同書はく通申れと殿てとむとあはる
又おのく扱は實城ちりわてまむとつよや 百子鳥ハ名おほ
きなり百子名の又百子名ともあるふ回一 百子名とつよ名の
名よりいれていさみしてつ時百子名とつよとつよとま
る一ハ雲は抄小書はつよ又扱實城とつとむとはまは
号成百ちりりてと従小依て此款と思ふまをくられま
一首のまをせ七に考ハまのけとまをまをまをまをまをま

○たのりい

お思ふ人ふととさまいよ孝にひりかをわかつ
浄釈云奈麻強ハ愁乃字なり和修の言は生活也生と執

ほどき物のまゝに執心せぬよりの御ありは御心なまこと
 執るといふ類なり後ハをるはしと越うらおかく強て
 ころり今の俗信よ或ハ有るも中然るハなほ
 して半^{ナカハ}なるまゝなり候令あをさす寸に火のれれと有り
 はやぬハ水もぬあは湯も何とてと後まやなら
 う愁なりはせハ世教の意思ハ我人よはしと志のひあ
 せよまよみせしとありハハまやうハまる半なりと
 〇屋はたはうき

玉崎の門よりふりてあれと君我をさしとけハハあり
 清親云我住ハ門よりと君ハ心ありてさか
 人なハはまに同くまひつれとまめほくありて

善く申はりきとなりやうしと恥しきなり俗は情
 人を屋さし人といふ情ありて恥カ人といふなり美
 麗なる人をは人のうはししめさうけく人といふ
 志かるをそ業越うとせと教訓してんやけき
 則^チ情ある事と思よハ誤なり古今に年のおりむ
 一は竹石物語よまけふまふみのるまをむあつ
 むゆ人ぞやうと源氏本はらう今ハ志今め
 き人を後してりかほむあまみよ人の情して
 めのたまらんも人ぞやうかろ一是ホまをいよま

〇谷々

万葉集又山と信良令^{ルカサ}及感情長^キあけ中^ニ 天雲乃向^カふと極^{キハ}

たよくは。さきさき

清叙云第六に言橋虫麻呂とかくみるに谷潜タニクとまりん
を谷くまて蝦カニの舌多かかつるをわつりける谷よとま
あをうれいひ名をおきたるるへ草カヤをくくるをよとて
鷄をかやく記といふ如し延喜式第八祈年祝詞に谷糧
結サワトル 杖度極とある儀たかまきと鳥さるも後人の何やまれると
ちりちりさるるとたよくと鳥はるし

○勤臣イソシノオム

天平勝宝元年の駿河守橘系造東人よ物つる姓也いしこれお
ひとよましくし又徳の多録史に云く東人の九經を通し
た各儒と裁きん

○いかり勢

万葉第十六に吾を説も下略
清叙云法なつとらうの鳥と今按日本紀小碓とせとまら
あれいさるもせとよむし後の奇もいさるもいはいは
ふきせとよらり

○玉けりき

万葉第十六巻中乃影よ詠玉掃タマハキカマム 掃ロノキ 天本香棗オウメラ 奇此
清叙云玉掃ハ第二十に寶字二年正月二日内裏よ玉掃
小玉帚と賜アて肆宴トヨノアカリあり久依付い家持の始ハジメ 玉掃ハ
乃まよの玉帚とよらるに付て先き此是後まらるれと
今の影并よ前に依ふ小玉帚ハ草の名ありと云くは是と

之律律是故天子法律三字又与金剛之字雅古賢不免失誤
依知此事朕名空遊覺也

按法皇為羽院律事也

○吉凶前小定休

と云ふ所の卜珮と郭璞と姉とありまか姉に易学小通を
人として作りしある時郭璞はよく卜珮をみてそこにまか
ら守兵厄をまねれとありしとよ卜珮よく吾は十一歳にして大
將軍とかりて禍をうけて死ぬへしそ解るにまか終をよき
まりし郭璞よく吾は八歳に江あまてあつたしとよ後よは
多して卜珮ハ劉聰の大將とかりて軍にまけて死しぬ郭璞ハ五
敦とまかに殺されたり

今按此二人易道ふくむを志てそ身の吉凶をうかめしれり
しそその禍をさるは用をともなきやゆるれと過るにさけ
まぬ運数試しむるなるへしおよそ生死禍福も亦一定の數
あり或は子におくれ妻と別きて思ひを胸よましけりいかに
たぬる主人より身れいとあはれたまりて流浪人となり或は
高賣此利を失ひて貧困のなげまはれりはとそかきるか
さりの苦患れさぬくなるも皆一定の數とおりのあまらるる
るけき成をばあゆむべき事なり

○蟻とほし

狼邪代碎編といふ小説云孔子得九曲珠欲穿不得遇二女教以
塗脂於線使蟻通穿

本朝よりありとほりの故事ハ此小説をかくりうりきるにや

○まろが乃月

正徳三年の八月十五夜小石川の藩邸へ 養仙院君ワツキおひ

あるに 主公此詩詠

あふひ三み乃月と波まをきりしと

養仙院の君同き侍りてり後とみに賞したまハ庭のきり

きりともをけりしと此詩詠のたふも桂の陰ふま

えをちとてたん

及三位綱條

秋もなつは月とり形の乃あふひしと

君のむありと

そてとあなつと

今按養仙君よりハ八重姫君とて憲康乃波女故中將君

吉字此詩家ハ主公の御よりたふり寶永六年の冬也やも

りふをむひてより本殿をけりて部中山の山殿小まほせたま

○雄略此皇后

此帝高城山に狩獵したまふ時噴指ありて草乃中より暴よ出て

人を追ふ獵後みぞ思ふて或は樹小れありはをきりぬ天皇舎人

某に詔して乃しまく猛獸とて人も人小逢てハ憚る汝逆射りか

は刺殺とあつるにその舎人懦弱て樹小なりて其城より人ぞ噴

狂直小来りて天皇に向ふて噬奉るといふ天皇やくり勇壯ま

まゝを弓を以て制止り脚をりけて踏殺給へりけりかめ舎人を

斬きじつ一即小成皇后

幡按

誅てりはく陛下田獵を樂す玉

ふとよかづけりよ况や嗔怒を以て人城殺したまは急

愛なきゆゑちと天の皇子と共小成車よりて

降りたまひはく万葉と字て人皆禽獸を以て腹は善之成獵

ゆりとも後志を即小日本紀雄略紀小成を以て

今按此皇后の清誅云ははる小成皇后と共小成車よりて

傑乃つひありてを以て誅之成用いたすは後世人君のまねひ

さ勢とすまふ又美事なるなり中つて成を以て

○辞世は教

天正八年播州東郡乃智護三木の城主別所小三郎長治舎弟彦

進友之伯父山城守賀相等秀吉公と防戦するはさうりかは苑

城一法卒の余成多むけては切腹せん事を秀吉に約し共

小妻子を教して自殺しぬ城中より命成を以てかりて出ると

のかは辞世の書とるを以てせく人よ志めしを以

長治

今ハまも恨もあはれ法入乃命よりかを以て我身とおひけ

長治妻

り成とのに消えけりてせうれく終おとせ先づのひなる世

友之

命をも城一使さりきり梓弓末乃代まで農多成おひふとさあ

友之妻

をれめさし後乃世までにつくはを以て世はゆるの契うけりき

賀相妻

後の世は道もはよりしおとひ子我我身にとて初末れを
三宅肥前入治忠ハ世治ク家臣トテ殉死スルニ
考るくは此身の命何をん誠てかひのあふ世よりとる

又

天正十一乙酉月秀吉公小國小起き柴田修理亮勝家を攻むし
時勝家さしりの良ねありしかも防戦利をうらむして同廿日於
とらるるさしりふ家臣又阿まの女房氏中城一所小よひあ門め
て今生名跡の洒妻を奪し夜ふけぬまは勝家夫婦志をく
国よ入く婦人よむうひつとこハ家内府公 信長乃津妹るん秀吉
とるまけちるるし明於此城より出さぬひて恙なくおを替ふと

再三いき免れれも婦人の後よりに死んず城ちきりて何れい
とかるふお母の折あり杜鶴の夢成ゆて
はぬたよおぬるほくとなるの折れ夢ち証さふ山おとる
返

小谷津方 信長公時

夏れよの夢ちはるふ文政の名を雲井より何まよとほりき
ゆら母曰婦人をしし教し勝家切腹して中村文房といふと
乃よ首伐るくや又若も危うそふはく自害しぬ文房
ふにい

思ふくちおはせつとせりゆ忠志るるや死出のやふあふ
たれ二件と察友お大串平お元若うお倍り秀吉遠る

にせりつとせ三本柴田城をちりて死す婦人もあはれなく
まのまにかきて治忠文を主人小後て切腹す高直の嵐
象ちりひるるにささやうなり奇成さへはれうしはまに
そらふたをりどくわくそゆる

○渚名

万葉才七人一
はくこの渚乃まをり流してははれりたてくふふあつと
序叙云東方の渚ハ倭勢也流名は八雲中野小海洲也と流名ハ
せりハ何身れるままれ洲小居る名今按才十小大渚乃
荒磯の流名とよみたるに又と流とわる洲小居る舟もま
わはりつ流ともよみたるに流名とたはれつとわらふと
詩云開と鴨嶋在河之洲今此名小流まよひたてくといふと
けりふうねるる

○山菅

和名山菅云本草曰麥門冬和名夜赤浪序叙云瑠璃花名して山菅乃
大きなるは実のたなりなり万葉集七ノ妹々多め菱花実よりハ
仍と進と山菅まよひて此日菅一山とよみをか山小菅花おろく
よみ文字山菅ヤニスケもまよハかろし山菅門冬とよみまよぬ
て山小生まろ菅なるなり

○多らつり

万葉才十八天平感寶元年閏六月廿二日大伴家持乃乃楯の
長子にかまはくもりもにかきし
不傳世小田道同守タチモリ常世小トコロ下畧

御歌云和名抄曰檣一名金衣和名方知波奈南方草木状下云白華赤實皮馨香有美味と抄此檣と云今乃世に蜜柑と名付休菓たり俗にたらつるものとて柑子に似て少くは皮のいろ黄あしてあからし味と少酸くして苦きれは美味なりとい凡檣と柑と詳かよはらうらかうらうへしスメロキ皇祚の祚と云垂仁天皇なり

○山左地をね

万葉集四春日王河の山檣乃多ふ出くかごひりまてあふもらむと抄云山檣ハ言塵抄云世俗亦少柑子といふ也檣と云の時に多ふといふは草なり今按此集にうまるとある中に青七奇州奇州中にある古紙の志るなり法外細くは本にうまると

中よ山檣とあはれおるはらう檣一近き式道酒式の大嘗と云祚修也此道又よら弦葉ホヤ寄生。真前草。日蔭ヒカケ。山孫組ヒコクミ。山檣子。表等賣草。各二擔とらり實の珊瑚の如くなるおまれの多ふ出るといふ及又序ふおけり古今に友則おけり山檣乃の多ふ出るとあり

○うけらう花

万葉集四春日王出ひ志けた袖をふらむを武蔵乃うけか花乃多ふはなゆえと抄云段白の多うけらう花と云或は色くは字家良ハをけらふく白木なり和名抄云尔雅注云木儲律及和云木名乎み良云本草綱目云夏用花紫碧色又云莖端生花淡紫碧紅數色と云かくはく花の咲きのたれを花と云くゆめく多うけらう花と云むら也後抄云此花をけらう花の咲たうひまきと云

きつよきく是は万葉にうけう花とよめはあぢも城ひきまぬ
とまぬらんきるぬめを此書にうけう花とよめあぢみまふ
出る城かりてまぬく多ふ出たともありな孝の法説もはまたり
種花のまぬきまぬく 為章按もるに古人の万葉をうり
を沙汰きしれまぬくあぢかぬの得り城ひくとの後ま城又う
まはまたてうまに相礼なることうまのる白然り後新たとの何
屋まり城うけてうきう花ひくぬうにまぬきまぬ人まぬし

○通茂公の歌

藤原の侍醫板垣法橋真庵宗騰を系階へよきまぬ一時孝に百人一首
和方此講義を中院通茂公へうけまぬまぬ侍にまみてたまひき

方

たぐまてもたふまぬ侍まぬまぬをうらう山

くくはへへ道もはまぬく

○蝶多集の序跋西山公の侍女左近局集也

むう紫花君のぬおの品定に女の是はまぬと雅きまぬま
かこもあつかるまぬてくかまぬまぬの志れくまぬまぬ
おふまぬ十思ぬらうらあぢ人のうへ城むくおかぢりはう
けいあぢへとないしあぢまぬまぬ又かぢ日記まぬまぬくまぬ
世にあぢり女まぬのまぬ城まぬたぬ城まぬに物定と同一おぢまぬ
あて婦徳ゆけい人のまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬ
まぬまぬまぬまぬにまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬ
まぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬまぬ

梅娘乃あひをうられ河波すゝりえて雪の糸針みくもん

白蓮を

白妙若もらもろこの露れまきとて花もつらんあつてもかき

落

我宿の一切もききほよいてたの死もねぬ時まねくらん

秋乃くゞ火を

萩乃露ももれつゝあつたをわけて足跡もゆきと秋のつくれさ

朝雲

吹まよふ露糸うよ風そよそて志のふもよけさの初雲

曉別意

小夜衣たふらばまきん志のちれあつたひき名おあつて

述懐

かくて世よりのまて草れつゝあつたをねえ歌をやきん
求むとあつたあかきふせの中ふたもひきんこれをはりあき
露もよよ草の庵乃かりのせよ志りの夢もかけはりあん

あかりあつた人のむすぢあきひて富永大花えせのね
に死つゝあけるうさうあつたなりしあつた

祢きこも今あつたれあつたのあつた消てあつたあつたのなつた
年は産産なとけりりけるうあつた

思ふとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
水戸へあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

岩の形に如く入寺にまゝして作し小松陰の岩を先づりて
清水れを流るるをあらうこれ上人此上人の流と名はま
たよふし乃てまひかへ

松高ふは松老流乃志し多は子代をわけあや流ひがくらん
流轉生死乃意ふ

吹風小ちるかへれを又そ行くも好や六の乃志を乃志
くをいふ流世の中にまゝふ流んかつぬ道の用もろをわ

上品上生乃心を

ま守後むし心のまことより佛乃かまはうのまきりあり

辞世 今按正徳二年壬辰七月二十三日卒七十二歳
法名備之一静大真尼

又も来ん人をらひくえめいづれは乃若くはたえぬなくとと

改

国同才子世必並称清紫其实紫優於清蓋吕才不浮于德也古之
婦人不吕才称吕德称及漢班婕妤好曹大家輩始吕才顯而德亦媿
焉魏晉澆漓於有辛憲英明敏端慧豫料成敗若蔡文姬流君子
不取焉才德兼備者丈夫且難矧在婦人乎苟或有之希世而一
見若一靜者其殆庶哉乎典壹圖三十餘年内人咸懷其惠婉嫺
貞淑頗通書史所詠倭歌不下一千首晚年悉焚其稿止留三百五
十餘首間作詩亦焚之所留和歌必其可傳者而所焚未必皆不可傳
者取舍之嚴毅然不顧而處身範物操守之篤益可知矣友人安藤為
章釐正成卷題曰蝶夢集叙其才德徵吕紫娘之言可謂擬於
其倫者也余久忝迎侍熟知其為人雖列之於古之婦女良其所

媿儻使之为丈夫從容政事之堂贊襄徽猷必有可觀此非余之私言而輿人之誦也一靜名吉子村上氏更稱左近既老削髮為尼自制名曰儵之字一靜

正徳癸巳之秋

澹泊齋安積覺跋

○今式部此おのこ

先妣山田氏龜子丹州粟田郡子年郷中村出雲村の南乃産一睡躬山田道夢居士乃女なり居士八連高城好て秀逸の句おあり愛を子山乃無言は昨今教谷の立法作たしく名を記しうきれり山田氏記憶はうきせんつふして居士のかさくはるひて古前三子そはより時よかけを好へハ幸ようむもを教へる安永此女帝の

おろわきせ聖仙洞よゆかりの女房のゆかりの道多るにせてふにかへの心よういよるされくるし後先考朴翁の嫡母河合氏それら心きほらうりく裁縫おはくくまか文教もむかひにきまわたりてへゆてよりきくをむくはく二十支の時先考お配きれり先考りより考是教藝古の折ありと流きあひか多ひていもむしりく督子為実為章久子うちつき産生りりきりふれは母か乃仙院おと東福門院浄所りりいも好君此浄方伏見宮の浄甚布たつらけの法極ふも多りたれてうらしく浄教あそはさくくはるひつれかすはりかて今式部のありくくをばきれりりり嗚呼かすかか子生縁うまうらうそて寛文八年戊申正月十一日の夜病乃為よかこれとあしね時よ三十九歳遺骸ハ東山末め堂の葬地よりとほめ

澤若菜

まをほつあきほあけうもこほりこくあかけふつあをそつむ
かむむあのみ月城つれそ袖のよふとうしをはふ風の梅の香
夕月夜かすかのうれく雲ほよりはをうたをれるとらうきん

月乃あ梅

夕月夜かすかのうれく雲ほよりはをうたをれるとらうきん
あけ後の蟬
夕立の色れハ屋うたなく蟬のききもきくしとあ乃下か針

八月十六夜

あけのよれハ屋うたなく蟬のききもきくしとあ乃下か針
あけのよれハ屋うたなく蟬のききもきくしとあ乃下か針
あけのよれハ屋うたなく蟬のききもきくしとあ乃下か針

秋夕

あけのよれハ屋うたなく蟬のききもきくしとあ乃下か針
あけのよれハ屋うたなく蟬のききもきくしとあ乃下か針
あけのよれハ屋うたなく蟬のききもきくしとあ乃下か針

夜とほくねて結意

あけのよれハ屋うたなく蟬のききもきくしとあ乃下か針
あけのよれハ屋うたなく蟬のききもきくしとあ乃下か針
あけのよれハ屋うたなく蟬のききもきくしとあ乃下か針

○由旬

あけのよれハ屋うたなく蟬のききもきくしとあ乃下か針
あけのよれハ屋うたなく蟬のききもきくしとあ乃下か針
あけのよれハ屋うたなく蟬のききもきくしとあ乃下か針

八万由旬智度論作三百三十六万里

本林尚謙云由旬長短諸說不一智度論云由旬大者八十里中者六十里下者四十里名義集云印度國倍乃三十里聖教所載唯十六里按俱舍論云七麥為一指節二十四指節為一肘四肘為一弓五百弓為一拘盧舍八拘盧舍為一踰繕那踰繕那乃由旬同今以日本里數計之一由旬二十四町餘也

○一里

風俗通三百六十步 公羊注疏三百步 輟耕錄二百四十步 日本一里七千餘步

○隱政直清

字ハ文左衛門と稱す三浦玄波守明教朝臣小仕へてその參政借小用人

いしりたり彰考録乃一松拙字ハ又と舊友あり

三喜の夏一松氏亭氏討ありやとれもつれをかりに三十餘年をたそそつたういよむとらありけり半もゆりあひ武まのかいりいし文眼もはしとつたみさきくは南在小虫法りちる

一

一松拙

廻りあひて名ろくはせはり徳もに志ね箱とてや色はし

○和漢同趣

系系才二十天平勝寶六年四月二十八日大伴家持の歌

伊叙之鷗陽永叔種花詩云波深紅白道相間シ先後仍シ源次

小水に依りて来るはのかつに寄宿して七月乃未始之藝
冲筋に對強し何れの不審とすを信ずりて之を神不念月
におりてをよすしけむりしを八月に未つるありて下向
——西山へ入りてつきのしき言をすあるにいつてもいふを
好ししをわすれしをいふの十二月に小麓去ましくきる
契沖野もつると考す月サメに身まかすなり 義公を
文武兼備乃英將契沖ハ古今無比の奇學との間ハ能細きハ
身此意よくせたりしそいれをやうたはれ乃多とけりて
人間世改訂して懐旧のなふりおさくかやうそけり

○雪蘭居士大串元善碑陰

居士歿之明年弟僧高順鑿石使余碑之未及書罹災石焚

言ハ成今茲僚友井松隣藤羊山諸君買石立之徵余舊文惜必
不能記感其篤誼悲且泣曰余與居士相知之厚不但骨肉忍使
其墳無碑乎吾負吾友久矣因人成事録固不足齒雖茲諸君
周旋之數不銘乎居士諱元善字子平姓平氏平野鞠于祖母大串
氏冒其氏稱平五郎號雪菜又五郎之弟母佐藤氏生于京師
幼小聰悟絕倫過目成誦年十三抵武江 義公廩祿之使就懋
齋野傳肄業研經義咀嚙史鑑孤往獨契議論屢出人意見
表其深思敏瞻咸謂青出於藍既長與修彰考敏史書淹貫密
察多所發明旁通 皇朝典故 雖詞意深邃事實不可捉摸
者考究研覈能得其要領櫛比縷折歷々如觀目前至今當史
局者見所論著莫不難其精確長於編削殆劉道原揭曼碩之

流亞也 義公知其能善遇之屢使京師購求遺書使于長崎
與清人張斐接斐稱其才元禄九年 鳳山公擢為近侍掌
編修事素尪羸多病至是增劇不能視事以十二月十二日終年不
滿強仕一歲矣妻森氏生一女葬豐島郡谷中御養泉教寺從其
志也嗚呼居士有經濟之具而不見於施為有博洽之才而未及其
底蒞接人和煦温醇謙遜寡言知與不知皆悅慕之而制行
端方有毅然不可奪之操家道轉軻雖得於 君而貧病果除
無年無子也躬耶通耶銘曰 才不勝德命胡不滅惟其卓乎有立是以久而彌彰

大井廣貞

建

安藤為章

正徳四年甲午 水戸府下士

安積覺撰

雪蘭子人品松茂也乃碑文小不くりるく元禄二
為章と同一く京上くてく別の社方くさひくりく今此
小石河くすくわくおくくくの墓代訪ひくたく妻と一女を
をく死くたくハ碑と多門くるく人くもく死くハく亡廢せん
をくるくに思ひくをく隣子く大井く廣貞居士の吹挙くといひあ
くくを安積覺く本林尚謙加藤宗伯く代本く之大夫く盡矢野
長九郎く童好中嶋平治為貞くなくてくみくおくむく一居士く志く
志くくく交りく多くるく朋友く方くハくおく乃くくく助力くしてく碑石成就し
なく不く牌位くをもく養泉寺に安置くしてく永くくく冥福くをく修くし

つる事ふかりぬ

○哀悼此教

元禄十三年十二月六日 西山公薨一たより京師へもて
 ゆくえゆりまゝに清水谷大勲之実業御より此舊記教書の
 事ふて申かたきせたまひたれを為章々許へたせ下されり
 中ふそれ子に里居る所の候きくおと後く神へかきて志す
 たりとせまて後く志すりぬれまを正き道者ふりたまはる
 伏見宮邦永親王の侍姫繁子ハ元禄帝の女侍小入内より
 かりしをあらうてその後やとゆりたれを永く深意おせり
 傳て学問和弄にのり清心とりまはを好みより為実為
 章々目此乃お徳氏 西山公少きゆいあはるりし

あまも後多しき事おらりて遍小いしききものに
 ひりきせぬよを姫君とて此内候しきのおおしきる小
 訃音をすりきりて右御門督乃局して仰せ下は身より出
 常陸の権中納言源乃らむむすれ玉の西にりよとる後
 をかなくぬりたしひわるりし候きりて

と海代といのりしきと母をいしてはこたふ世と更おはる
 七そちや三少をれ善成たのり跡りおほくもたれりあか
 ありうはしと十首はと一と路中かきせしあしあかしく歌を
 まうけてよみて語りたまふ

時雨

前大納言通茂

雲と今消しを回し七十はむ乃たりとせましく志くは

落葉

冬後實陰

つく時とありし冬種のり、此葉をばりし習とらふは嵐の如

寒草

前中納言通躬

野色の及れ秋と冬種とる、も今更とて志は小州の冬か身

冬月

左中將通清

又たもはん人もあし、かなさるよの月や時雨ははるるのりし

歳暮

左中將実岑

仍年乃多州にきてき、しかなし新志よ小神のまみこ

述懐

左中將定基

恨あまや心の友とをれ、しかなし身は又とねはあまやとねる

廿朝はハミヤチヨリ古籍の由許信より
アムサセたまひて伊勢面ハミヤチヨリ

懐舊

前中納言實種

未とほくか、終りの名ハとびともあつ、ぬ水のらりし世の中

侍奉

頭兵輝光

もろ形なる時ののこ、もろもろあま、一扱乃夢は世々中

無常

右中將有慶

もろけりぬ、ぬれしれとをまき、ぬれしれとをまき、ぬれしれとをまき

釈教

前大納言実業

志ふふとよ、志ふふとよ、志ふふとよ、志ふふとよ、志ふふとよ

此お諸方より追悼乃待教文章、らりりて一大冊なり、哀挽

餘響と名付たるを、癸未の十一月三十日、小石月、り乃

大火、不焼、ゆりぬる、ふらら、おぼえ、さる、さかり、をと、た、ま、は、は

船橋式部少輔清原經賢ハありて先多出家して志言宗と
なり常覺と名けり自息軒と号しゆとより新き世
阿比八家兄為実の水戸の家ノ喜ひを云哉 西山公
きちり然して扶助し好ひおし清山居士ありて此道
のかゝる人なりしか此覺去のゆるまき清墓よりてに梅花
をよむ心とて

咲ちま川流ふかさを梅の花おりのぬ山ふま向はるか
麻島郡宮田郷岩船山教入寺惠明院如晴上人を本教古常
上人のせありしを運寶に始まねかをむいていとと志
をりて解し給ふ覺去の後雪のふる日此暮はうてゆく
小那山や雪ぬもてけて君を思ふありし哉昔れ下にさふり

三の夜まとりね君の影さだまひと月や下は
蕪りよはふと乃志つとてりり

中山備前守信敏 藤府第一
補相なり

今日とてを眺る月日とかな文彩を志ふおひよいつまぬま
西山の山跡(ま)つりまらにいつりか人けしをなく朝も
松のまはしきまきたてりけきハ

市川味禅翁 三友徳門
弘道入

君も生て今もさ清うとね乃松ひらうて代の春うぬれ
源行正 肥田十左

新まうしとけり此山乃いひをれま君うまををねしとて

藤原忠顕 菟さみ布

裁とせうありよ、あゝの露成今袖のなるとんそく志存る

清原長秀 校本エカ

琴一少成ありし志のりて我々も、ハ袖うおらもとあけ

藤原治之 岡見治平

後志一、招とどらむ西のや雪かした中く、らうのま乃かき

有同治部少輔光近ハ廣橋儀同三司兼賢公の孫なり伏見

宮親王少侍て為実為章とけく、かのの屋に交り侍り

らる致仕して素朴居士と号し、京師塔殿すはわし

と一此由志ありてハ恩顧のりきり此訃音をゆつてよみて

おくり侍りけふ

いふるんたけまありとんも、志のく思ひ成るは袖のひさ

口方人あり、免つよき、西乃たふよ、わな、ひか、き

子代おくと、侍も心成、はくもねのよけ、ハあ、てう、ハ世れ中

○孝子彌作

常陸の玉乃方郡玉造村よ弥作と、子民あり、生れは、ま、実、や

か、う、て、母、よ、つ、つ、て、至、孝、な、り、母、に、田、耨、を、た、れ、ハ、備、力、を、て、

た、い、ら、る、を、扱、ふ、と、衣、衾、を、け、し、ハ、母、乃、さ、む、ま、儀、か、存、し、み、て

弥作、ま、さ、あ、る、拍、を、脱、て、母、よ、お、り、よ、ハ、母、の、あ、る、弥、作、は、む、か、

ん、事、成、ら、む、と、て、あ、つ、ひ、お、り、い、ち、り、ハ、母、の、こ、を、系、に、ま、む、く

を、お、し、て、り、の、こ、く、う、ら、た、て、母、の、よ、く、眠、る、を、侍、成、り、か、ひ

て、を、か、よ、お、ほ、ひ、き、や、て、あ、と、ほ、く、と、ほ、く、ほ、ひ、と、乃、ハ、弥、作

も、其、う、と、ま、に、ぬ、れ、ら、る、ハ、火、を、た、き、て、母、儀、の

たぐり孫作ハ火をほりりながら居ねありまゝなり人
 屋とつせと一ハ役おほきく他ふ出る時とわがむい乃
 屋にゆきて母城かつりたるひ孫一とてなみこゝとてあはれ
 出たりまけく焼飯して午ひつう餐まらばよきハ心もうらや
 てふところよひしそむのむ寸人のためとてふまゝわ
 らんとして夕はりのあふりて歸り母をうらやめておのれ
 々あたまの酒の手せ成ハまらう行くんくしを侍せハ孫あつ
 きたりといひ乃うまけける母時ハ頭痛の病とくるまけける孫
 化出のまじく膝を枕しあつて持たすまをうらやめてい
 別しきり母奥内城おりの時ハ孫作ちかよある色にまゝ
 何ふくもあきり歸りて速をとりまきあけるおふまをよ
 けり母ふりつる飲食とハ孫佛をたもは物のまゝにき
 えついでおのまはま孫りはあつてまをまらるは
 くる母もまは乃法義とまはりくつ成ハまらるまの
 方へゆつてなつて時と孫作もまは腰を折せ背中負お
 志の母の面白うなるまお侍う体してり歸りくる孫作十
 にはまらるかかむら形ひたれまま里人もいもまらり
 しのあひ孫作りなつて人との徳くまてま使するまは思ひ
 まらる延寶二ま西山公清在藤林をり姉たふら玉
 造くまらるまはま対ひをまらるては嘆賞のたまひ
 此馬のまにまらるて田畠英全なまを切ひつては感涙か
 たりそれより家の内をめぐりかまらるてまらる孝志を
 たり

たぐり孫作ハ火をほりりながら居ねありまゝなり人
 屋とつせと一ハ役おほきく他ふ出る時とわがむい乃
 屋にゆきて母城かつりたるひ孫一とてなみこゝとてあはれ
 出たりまけく焼飯して午ひつう餐まらばよきハ心もうらや
 てふところよひしそむのむ寸人のためとてふまゝわ
 らんとして夕はりのあふりて歸り母をうらやめておのれ
 々あたまの酒の手せ成ハまらう行くんくしを侍せハ孫あつ
 きたりといひ乃うまけける母時ハ頭痛の病とくるまけける孫
 化出のまじく膝を枕しあつて持たすまをうらやめてい
 別しきり母奥内城おりの時ハ孫作ちかよある色にまゝ
 何ふくもあきり歸りて速をとりまきあけるおふまをよ
 けり母ふりつる飲食とハ孫佛をたもは物のまゝにき
 えついでおのまはま孫りはあつてまをまらるは
 くる母もまは乃法義とまはりくつ成ハまらるまの
 方へゆつてなつて時と孫作もまは腰を折せ背中負お
 志の母の面白うなるまお侍う体してり歸りくる孫作十
 にはまらるかかむら形ひたれまま里人もいもまらり
 しのあひ孫作りなつて人との徳くまてま使するまは思ひ
 まらる延寶二ま西山公清在藤林をり姉たふら玉
 造くまらるまはま対ひをまらるては嘆賞のたまひ
 此馬のまにまらるて田畠英全なまを切ひつては感涙か
 たりそれより家の内をめぐりかまらるてまらる孝志を
 たり

去く同しき八年、母牙痛りり、及休時、と奴婢をたれ、手洗み
は、つゝ醫所の方へ行らつゝして、も、と、ゆり、あ、ハ、賣、一、つゝ、と
な、と、志、を、は、く、一、と、女、法、の、か、り、一、み、ハ、他、人、の、か、を、一、と、ま、一、お、と、は
勢、り、り、を、後、小、妻、と、む、之、て、農、業、を、つ、と、免、り、れ、を、ほ、し、く、一、富
さ、く、け、る、よ、は、を、て、も、何、と、母、の、世、に、ま、う、一、時、う、く、一、つ、一、ゆ、一、か、と
よ、海、あ、ひ、た、り、は、ま、一、の、城、と、て、一、や、一、形、ま、り、元、禄、七、年
甲、戌、小、六、十、歳、な、不、世、と、お、と、ち、ひ、ゆ、つ、と、と

今按中村新八郎顧言遺文乃中、小孫伝傳一篇あり、為章
と、い、つ、つ、と、ま、り、又、る、に、先、考、先、妣、乃、在、世、の、時、と、れ、と、と、れ
と、よ、孝、志、を、も、は、く、さ、一、一、なん、と、き、を、結、り、つ、る、事、と、と、お、い
り、形、を、い、さ、も、い、局、一、き、孫、他、心、操、よ、は、お、と、り、ゆ、り、ん、か、し

今や神主と拜して、膳をそれく、香をたよ、あ、れ、さ、け、ひ、て
と、か、ひ、た、一、一、又、母、り、一、一、ん、人、れ、と、い、城、よ、み、一、一、り、其、生
前、よ、と、辱、く、孝、行、を、は、く、一、一、き、あ、一、一、か、一、没、後、の、悔、行、表
益、う、ゆ、一、一、ん

